

## オーディオ実験室収載

### 音源の比較試聴(41)

#### —展覧会の絵—

##### 1. 始めに

前報(40)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

##### 2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも述べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じマスター音源のアナログ盤と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

**PHILIPS 28PC-3**

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

コリン・ディヴィス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

**Columbia OS-143**

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

レナード・バーンスタイン指揮ニューヨークフィル

**HiQ RECORD HIQLP013**

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

リッカルド・ムーティ指揮フィラデルフィアオーケストラ

ポリドール

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

クラウディオ・アバド指揮ロンドン交響楽団

配信は STAGE+とベルリンフィルデジタルコンサートホールから上記と同一の曲を選択します。

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

フランツ・ウェルザー・メスト指揮クリーブランド管弦楽団

モデスト・ムソルグスキー 展覧会の絵

トゥガン・ソフィエフ指揮ベルリンフィル

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase  
STAGE+  
ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase

### 3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

アナログのディヴィス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ盤は、1979年のデジタル録音であり、デジタル録音らしいエッジのたった音です。

バーンスタイン指揮ニューヨークフィル盤は、録音年代は不明でジャケットにはRIAAと書いてあり、RIAA、正相、第4時定数Highで聴いてみましたが、音の焦点が定まらず、音場が散漫なので、Columbia レーベルのColumbia、逆相、第4時定数Highにしますと音の焦点が合い、音圧も上がったようになりました。

ムーティ指揮フィラデルフィアオーケストラ盤は、HiQ RECORD レーベルですが、元は1979年録音のEMI レーベルですので、EMI、逆相、第4時定数Midで聴いてみましたところ、ハイクオリティをうたい文句にしたHiQ RECORDの特徴か、カッティングレベルが高く、強調感がありすぎるくらいの迫力があります。

アバド指揮ロンドン交響楽団は、1981年のデジタル録音ですが、デジタル録音の割にはバランスよく、エッジの立ちすぎない緻密な音です。

STAGE+配信のメスト指揮クリーブランド管弦楽団の演奏は、クリーブランドの燐銀の音と称されるセヴェランスホールの音の良さを反映して、デジタル配信でありますながらソフトで聴きやすい音の演奏です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのソフィエフ指揮ベルリンフィルの演奏は、ベルリンフィル大ホールの音を反映して、楽器の質感やホールの響きなどディテールの表現に長けた演奏が聴けます。

### 4. まとめ

アナログ再生とSTAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくっており、収録年代や収録環境の違いを如実に反映した演奏が聴けました。

以上